

「第1回 肱川流域学識者会議」の開催について

－肱川水系河川整備計画の点検について－

「肱川水系河川整備計画（中下流圏域）」は、四国地方整備局と愛媛県により平成16年5月に策定されています。計画は「安全安心の確保」「清流の復活」「地域の風土と調和を図った河川整備」を基本理念として、治水、利水、環境の観点から、計画策定後概ね30年程度の間に実施する具体的な河川整備の内容が定められ、大洲河川国道事務所、山鳥坂ダム工事事務所、野村ダム管理所、愛媛県では、整備計画に基づく河川整備を実施しています。

一方、計画策定後に発生した平成30年7月洪水は、検証の結果、ダムによる貯留をせずまた氾濫がなかった場合、現時点の速報値で6,200 m³/s程度と推定され、現整備計画の目標流量5,000 m³/sを大きく超えました。

今回は、現在の整備計画の進捗及び平成30年7月洪水の状況等をご確認いただくため、肱川に関する各分野から総勢11名の学識者のご出席のもと、平成30年10月18日、リジェール大洲において「第1回 肱川流域学識者会議」を開催しました。



平成30年7月洪水による被害状況（東大洲）

議長には、委員の互選により、愛媛大学の鈴木幸一名誉教授が選出され、議長の進行により2時間にわたって活発な議論が交わされました。



第1回 肱川流域学識者会議の様子

今回の会議において各委員から頂いた主なご意見等は、下記のとおりです。

- ・大きな災害や渇水があると治水・利水に目が行くが、時間が経過すると薄れていく。一方で、環境は普段から意識されやすいので、環境教育や親水性を高める整備など、環境の視点から治水などにも興味を持ってもらう取組が必要。
- ・暫定堤防を締め切った場合、これまで氾濫していた水が下流に流れることにより下流の水位が高くなり、堤防に加わる圧力が増加する。また、肱川は水を通しやすい地盤特性なので、詳細な点検を実施し、必要に応じ対策していくことが重要。
- ・河道掘削を実施する場合には、河川環境への影響も考慮した実施が必要。
- ・雨がダム上流域ではなく、下流に多く降る場合でも耐えられるよう検討が必要。
- ・ハード対策が進むと施設の能力に過信が生じる場合があるので、ソフト対策も一緒に取り組んでいくことが必要。
- ・整備計画変更が議論される場合には、肱川減災対策協議会の取組内容も確認して反映させることが必要。

結びには、平成30年7月豪雨の流量規模は、現行河川整備計画の目標流量を大きく上回っていることから、河川整備計画の変更について早急に検討する必要がある、河川改修等の進捗にあわせて、適宜ダム操作の検討も必要とのご意見を頂きました。